

赤カブ作りに挑戦！

「本紅赤丸蕪」

タキイ研究農場 林 祥治

赤カブは白カブにくらべて、肉質が緻密で、浅漬けやぬか漬け、酢の物の材料に最適です。風味も豊かで彩りも鮮やかになり、料理の幅が広がります。

赤カブには愛媛県の「伊予錮カブ」、滋賀県の「万木カブ」、岐阜県の「飛騨紅カブ」、山形県の「温海カブ」など全国各地で様々な在来種が栽培されていますが、今回は、比較的生育が早く作りやすい「本紅赤丸蕪」を紹介します。この赤カブは、①鮮紅色が美しい丸形の赤カブ、②茎葉も赤くなり、肉にも少し赤味がつく、③寒さに強く、土質を選ばず、作りやすい、④肉質は緻密で歯切れがよく、漬け物に最適、というように家庭菜園に向く品種です。



1 タネまきと畑の準備

□ まき時

カブは比較的冷涼な気候を好みため、むやみな夏の早まきは避けます。一般的には、9月上旬のタネまきが適しています。

□ 土づくり

水もち、水はけをよくするために、耕土は深さ20cm以上を、よく耕すことが大切です。

有機質を施す時には、よく腐熟した堆肥を、タネまきの1カ月以上前に1m²当たり3kg程度入れます。また、整地の前に石灰を1m²当たり50~100g程度施します。

□ 元肥

施肥は元肥を主体として、タネまきの1~2週間前には施し、十分に土になじませておきます。施肥量は畑の土質によ

って違いますが、1m²当たり化成肥料を150~250g程度施します(チッソ成分10%)。

□ タネまき

畠幅は80~120cmで、2~3条栽培として、条まきもしくは1力所に3~5粒の点まきにします。

カブはタネが小さいため、畠の表面の凹凸や乾湿の差により、発芽の不ぞろいや生育ムラが起きやすくなります。そこで畠の表面は丁寧にならし、なるべく石などは取り除いておきます。

覆土(かける土)はできるだけ薄くします(タネが隠れる程度の厚さで十分です)。乾きやすい軽い土では、タネまき後に軽く鎮圧します。

乾燥を防ぎ、夕立などの降雨で畠の表面が打たれることを防ぐために、タネまきした後に、モミガラなどを薄くかぶせておくと効果があります。

2 栽培のポイント

□ 間引き

間引きの遅れは、根の肥大など、生育の遅れにつながるため、早めにすることが大切です。

本葉2~3枚の時期に、株間8~10cm程度にします。本葉5~6枚で最終的に1本立ちにし、株間は15~20cm程度にします。

□ 追肥

追肥は最終間引きのころに行い、軽く中耕し、土になじま

せます。

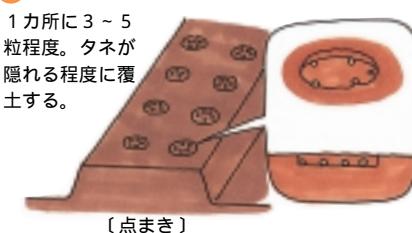
また、カブは初期生育がダイコンなどに比べるとややおとなしいので、草負けしないように除草・中耕をていねいに行います。

□ ス入り、割れ

ス入りは、作物の老化現象の現れで、肥料切れや極端な乾燥によって助長されますので、生育をスムーズに進め、適期収穫を心掛けます。

また、元肥の遅効性や過剰な追肥は、生育後半の急激な肥大を招き、根割れの原因となるため注意します。

1



〔点まき〕

ビール瓶の底などで浅く穴を開ける。

〔2条の条まき〕

2



乾燥させないよう水をまく。

3



乾燥防止にモミガラなどを薄くかぶせる。

タネまき作業

電話 08-033-01
本紅赤丸蕪

1袋(約1,800粒) 155円
1dl 1,370円